Session II　要旨

民具からみる東アジアの比較文化史

機構共同研究「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」班　代表　角南　聡一郎

稲作農耕・漢字文化・宗教など、中国中原文化が、東アジア諸地域へと与えた影響は計り知れないものがある。この歴史的事実は、農具や銭貨、仏具といった物質文化にも反映され、東アジア諸地域における文化の共通項としてしばしば取り上げられる。また説話伝承や生活様式など、中原文化波及以前の基層文化レベルでの共通要素も認められる。一方で、朝鮮文化、日本文化、台湾（特に原住民族）文化といった、中原文化とは異なる独自の文化が存在してきたことも明らかである。また、中国の中でもその文化は一様ではないことも知られている。

現在は、国民国家が成立し、文化はあたかも国家単位であったかのように語られることが多い。しかし歴史的にみれば、国家成立以前にはモンゴロイドの拡散のごとく、人の移動はダイナミックになされ、文化の境界とは常に変動するものであった。韓国の済州島（耽羅）や日本の沖縄（琉球）のように、かつては個別の国であったが編入された経緯をもつものもある。当然ながら、これらの地域では、韓半島や日本本土とは異なった独自の文化が現在でも存続している。

また、近代以降は様々な理由から、東アジアのおける人の移動は活発になり、相互に影響を与えることもあった。そして、現代社会においてグローバリゼーションが進展する中で、文化の接触や融合も加速化していっているようにもみえる。

以上のような状況に鑑み、本セッションでは、東アジアの民具・物質文化の通時的比較検討を通じ、共通性や差異をモノから読み取り、その背景に迫ることを目的とする。従来の民具概念に留まらず、通時的な比較を目指すことから、考古学資料、民具、近現代の物質文化に至るまでを包括して議論をおこなう。付言するならば、本セッションの発表者・コメンテーターは、それぞれ考古学、民俗学、物質文化研究、文化人類学、民具学を専らとしており、このような多様な領域から討議をおこなうことは、本セッションの特色の一つであるといえよう。